

公益財団法人



## すみりんニュース No.38

■編集・発行 公益財団法人住吉隣保事業推進協会  
 ■編集発行人 理事長 友永健三

公益財団法人住吉隣保事業推進協会 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21  
 TEL06-6674-3732 FAX06-6674-7201 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

## この号の内容

- 1 「人権のまちづくりを考える」すみよし  
 連続講座・下瓦屋南地区フィールドワークの報告 (1) ~ (4)
  - 2 京大のアジア・アフリカ地域研究科の  
 教員、インドのダリット問題研究者ら  
 が住吉地区を視察 (5) ~ (7)
  - 3 財団へのご寄付のお礼 (7)
  - 4 お知らせ (8)
- ☆第 22 回住吉・住之江じんけんのつどい  
 ☆NHK連続テレビ小説「マッサン」制作に協力!

## ■「人権のまちづくりを考える」すみよし連続講座

下瓦屋南地区フィールドワークの報告

## 下瓦屋南地区の保育所を フィールドワークする!

去る6月14日午前9時半から12時半まで、「人権のまちづくりを考える」すみよし連続講座の一環として、「下瓦屋南地区の保育所をフィールドワークする!」を実施しました。以下は、その概要ですが、今後の住吉地区でのまちづくり、とりわけ保育所の今後の在り方の参考になると思われます。なお、当日の参加者は8名でした。

### 【下瓦屋南地区】の歴史を聞き、村を歩く!

《下瓦屋南地区の概要》

ここ「下瓦屋南地区」は大阪市住吉区から湾岸線高速道路に乗って車で約1時間、大阪府泉佐野市の北西（関西国際空港を西に展望）に位置します。

朝8時半に市民交流センターすみよし北を車で出発し、9時半に「下瓦屋解放会館」に到着。「解放会館・青少年会館・保育所」の3施設は、ほぼ一か所に隣接しています。地区としては比較的小規模で現在公営住宅50軒と一般住居の130世帯の住人の皆さんが住んでおられます。この地域は瓦屋郷と鶴原郷が隣接し、解放会館の北側の境界線上に元正覚寺（門の一部存続）

跡があり、かつて熊野街道をおさえる要衝の地ゆえ根来・雑賀一揆（秀吉の紀州攻め1583~85）には砦として使われたと言われています。この正覚寺は、1999年、道路整備事業により西側に移転されました。

《支部結成と環境改善》

到着後さっそく中西常泰支部長と地域民衆史研究会の山中さんより、「地域の歴史と解放運動の成り立ち」の説明を受けました。1967年に部落解放同盟下瓦屋支部が結成され、71年に下瓦屋解放会館、73年に下瓦屋保育所、94年に青少年会館が建設されました。「特別措置法」期限切れ後の同和事業の縮小に伴う保



育所統廃合問題に対して存続を求めた取り組みを展開し、2006年に社会福祉法人が経営する「下瓦屋保育園」となりました。解放会館も人権文化センターと改称、2008年からNPO法人「ゆまにて」が運営しましたが、2011年に指定管理が終了し、現在は自主管理で運営されているそうです。さすが泉南の文化ですが、会館敷地内に大きな倉庫があり立派な下瓦屋南地車（だんじり）が収納されていました。

### 《地域の歴史》

この地区の成り立ちとして、500年ほど前に「溜池ためいけなどから田圃たんぼへ水を引く『治水』の技術を持った人たちが、入植してムラを形成してきた。」とされており、大阪府では都市近郊に所在する数少ない「農村部落」と言われています。地区の改善事業として、圃場（ほじょう）整備事業が大きな柱となりおこなわれてきました。こうした事は都市型部落との大きなちがいであり、圃場整備事業は、耕地区画の整備、用排水路の整備、土層改良、農道の整備、耕地の集団化を実施することによって労働生産性の向上を図り、農村の環境条件を整備する事業で

す。当時、専業農家1戸を含む10戸の農家が5haを超える農地を耕していました。しかし、その農地の多くは低湿地にあり、用排水に不便な土地で、先人たちはここに池を築き水路を掘ることで「水」をコントロールし、田畑を開き、二毛作できるように苦勞に苦勞を重ねて来ました。

しかし、南地区は数多くの池に囲まれながら「水利権」をもたないために、自由に使えるのは排水路兼用の水路と小さな池だけで「いる時の水は来んで、いらん時の水ばかり来よる」と村人を嘆かせていました。また村が浜側へ農道を延長しようとしても、隣接する一般地区の地主は判を押さず、途切れたままでした。その根本にはオモテ向きの理由とは異なり、「部落のものに便宜をはからせたくない」「道によって部落とつながるのはイヤだ」「土地の評価がさがる」という根強い差別意識の存在がありました。

1985年から下瓦屋南の人たちは、市街化区域でも可能な「都市緑農区基盤整備事業（大阪府単独）※」の実施を府・市に求め、長く辛抱強い交渉の末、①圃場整備、②暗渠（あんきよ＝用排水のため地下に設けた溝）排水工事、③鑿井（さくせい＝深い掘り抜き井戸）工事の3事業をかちとるに至りました。

### 《フィールドワーク》

フィールドワークでは、圃場の整備に伴い拡張された道路や隣接する鶴原地区との境界路地や歴史ある田圃、泉南名物の温室での水茄子（なす）栽培（地区の青年が年2回、土の入れ替えや暖房の調整など大変な作業をおこなっている・・・）などを見学しました。このような差別とたたかい整備されてきた地区内の田圃を使って、近隣の保育所や小学校、他市の小学校からも自然体験の受け入れをおこない「命を頂いて生きるという課題」いわゆる人権教育にもつなげているそうです。

### 《伸線業の歴史（補足）》

この地区のもう一つの重要な産業に、近代産業としての金属加工業があります。1918年（大正7）に泉南郡北中通村字下瓦屋（現・泉佐野市）に東洋製綱株式会社が創業され、ワイヤーロープの製造が開始されました。

### 圃場整備事業竣工記念碑

熊野大道の南に広がるこの「南代」の地はかつて、藪におおわれた荒地であった。

歴史の記すところによれば、五百年を遡る昔、ここに居を構えた先人たちは、人の世の幸せを求めて、池を掘り、田を拓いたという。

爾来、われらは、いわれなき蔑視をはねかえし、己の血と汗でもって土を守りとしてきた。

幾星霜の時を経て願は、今、実を結んだ。

われらは、ここに、人と自然の共生をめざし、農業の未来を切り開かんとするものである。

一九九三年三月

そして、このワイヤーロープの前加工として伸線業が、第二次世界大戦後の東洋製綱周辺の泉佐野北部地域、とりわけ下瓦屋南と鶴原東地区において展開されました。戦時中の人手不足の中、東洋製綱に職を得た人たちが、その技術を村に持ちかえり、納屋や牛小屋に機械をすえて工場をおこしたのです。高度経済成長期には、二つの村が一つの工場のようになり、大阪の近代産業の一端を担うまでに発展してきました。この事によって下瓦屋南地区の「自ら田畑を開墾し、また産業を興していく」先人のたくましい歴史と伝統を感じる事が出来ます。



### 下瓦屋保育園見学

フィールドワークの最後に、下瓦屋保育園を見学しましたが、ここでは、保育園を運営する社会福祉法人常茂恵会（ともえかい）の中西常泰理事長、中西小夜子園長他2名の保育士が参加、保育園の民営化の経過、その後の実績等の説明がありました。説明後、質疑応答も行われました。

#### 《下瓦屋保育所の民営化の経過と現状》

中西理事長：

当保育園は、泉佐野市立として1973年8月に竣工しました。前史として下瓦屋地区の就学前保育がプレハブ園舎で取り組まれ、市交渉で建設にこぎつけた経緯があります。長く35人定員でやってきたのですが、民営化のきっかけはその定員に対して地区児童は9人にすぎなかったという過去の実態がありました。地域外からの利用も促進（混合保育）して利用者の伸びにつながったものの、市の財政が厳しくなり民営化を阻止しようにもいったん流れができると止められない面があるので、せめて統廃合は避けたいということもあり、受託に向けて準備をすることになりました。

地元の社会福祉法人常茂恵会はずでに1997年12月に設立しており、高齢者のデイサービスやヘルパーステーション、在宅介護支援センターなどを運営していました。これにより、手を挙げる条件は満たしていたのです。（注・大阪市の場合は保育園運営実績が条件にされている）

公募にあたり、当法人以外の参加もありましたが、結果としては当法人が残ることになりました。それでも審査はされ、園長は保育士経験40数年を超え、また日頃は子育てボランティア等活動経験豊かな方に声をかけたところ、快く引き受けてくれた。園長の存在は保育園運営にとって欠かすことの出来ない、いわゆる要であります。

応募の動機も建設以来の地域のかかわりを訴えました。さらに、既存事業の財政的裏付けも条件としてありました。この公募があった2005年にグループホームと有料老人ホームも始めていました。そして、2006年に受託となりました。

受託時60人定員に対し43人の児童というところからのスタートでした。保育士さんは市立の頃からそのまま残った者は1人だけで、他園含む市立保育園経験者が3人、その他18人、調理など他の職種合わせて職員は28人でした。

利用児の実績でいえば定員割れでしたが、早くも2年目には60人に達し、現在は72人ですが、職員数は28人のままです。

保育園運営費は市から出て、保護者からの実費は園に直接入ります。建物は市から無償供用ですが、土地は市有地貸与です。

受託時より0歳児保育を始め、入園児の定員増に伴い、受託2年目にはホールを作りました。費用は3,700万円かかり、補助金及び自己資金により建設することが出来ました。

### 《質疑応答》

Q：地元の子が地元の保育園に入園できないケースなどないのですか？

A：市の人権推進課に相談してもらうことで対応可能です。現在、周辺含む15人が地域の児童で在園しています。

Q：民営化で職員が大幅に変わったが保育の質が維持できたのですか？

A：もちろん不安も訴えられ、7人の方が転園されました。ですが、従来から実施してきた「はだし保育」の継続や看護師や男性保育士の配置といった保護者会や地域の守る会の



要望も受けて実現させるなどで質の維持に努めてきました。

Q：生活環境に課題のある家庭への対応は小中学校との連携も大切だがその辺はスムーズにおこなえているのですか？

A：公立の時の方が保育園だけ孤立しがちだった。職員の異動もあったためです。現在の方が卒園式に来賓として出席してもらえるなど関係も築けています。また、以前は近接の長坂小学校だけの関係だったのが、何校かに広がりも出ています。生活面での課題では、親に障がいがあるなど登園困難の児童には送迎を実施しており、実施している他園では園からの距離を条件にしていますが、当園では親子の抱える課題に応じての実施になっています。

Q：病後児保育についてはどのような状況ですか？

A：泉佐野市では当園のみの実施です。他の市からも問い合わせはあります。病後回復期に親が引き続き見なければいけない状況にある児童を預かります。他の教室とも分離して対応しています。登録者は200人いますが、実際の利用人数は年に70人くらいです。前夜までに診断書を出してもらえれば対応可能です。

Q：保護者会とのかかわりは？

A：2か月に1回、園との交流会があります。

Q：ケース会議などは？

A：市の家庭児童相談室（家児相）が中心になっておこなっており参加しています。

Q：現在の課題は？

A：来年度から「こども園」移行も含めて態度を決めていく必要があります。いずれにしても今後保育士も幼稚園教諭免許も保有する必要があります、5年間は猶予があります。若手の保育士は両方保有も大半になってきていますが、ベテランの方が期間内取得の問題があります。

Q：民営化でよかった点とリスク面は？

A：よかったのは、法人の考えで運営できる点です。枠にとどまらないことが可能になります。「苦情は宝」という発想は公立時代ではありえなかったです。リスク面は、やはり職員の待遇と定着です。保育園で年に1億（法人全体で3億3,000万円の事業規模）収入がありますが、人件費率は75%に及びます。法人内でも独立採算を求められる中で、昇給や定着率さらに建替えの費用の対応が求められています。

【注】大阪市は橋下市長の方針で、2015年3月までに市内の保育所を完全売却による民営化を図っていました。しかし、実際には議会でストップがかけられたので、区で1～2カ所は公営で残す方向ですが、公募にかけられる園12カ所についてはもうすぐ出されることになっています。



☆中西支部長をはじめ、今回の訪問を快く引き受けてくださった皆様、誠にありがとうございました。

## 京大のアジア・アフリカ地域研究科の教員、インドのダリット問題研究者らが住吉地区を視察（6月1日）

去る6月1日（日）午後1時半から4時半まで、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科教員の田辺明生さんを中心とする11名が住吉地区のフィールドワークに来られました。一行の中には、インドのダリット問題（被差別カースト問題）を研究しておられる2名の方も参加しておられました。最初に友永健三から「住吉部落の歴史とまちづくりの歩み」についての説明をおこない、地元から参加した木本久枝さん、友永香鶴子さん、友永健吾さん、村田望さん、吉田愛さんを交えて質疑応答が行われました。通訳は、友永雄吾さんが担当しました。その後、一行は、住吉地区内のフィールドワークを行いました。

以下は、このフィールドワークの責任者である田辺先生から寄せられた感想文です。今後の住吉地区でのまちづくりに参考になる意見も寄せられていますので、ご一読ください。

（事務局）

### 住吉地区を訪問して 現場というかけがえのない経験

このたび、2014年6月1日日曜日に、総勢11名で住吉地区をご訪問させていただきました。シャハナ・バッタチャリヤさん（インド、デリー大学キロリ・マル校教員）とラームナーラン・ラワットさん（合衆国、デラウェア大学教員）はダリット（「不可触民」とされたインドの被差別民）の研究をしているインド人研究者ですが、今回、国際会議で来日されたのを機に、日本の部落の歴史と現状について学びたいと希望をされたことがきっかけでした。友永雄吾さん（民博研究員）にいろいろとアレンジの労をとっていただきました。他に、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科教員の藤倉達郎と私、同研究科研究員の中川加奈子、同研究科大学院生の飯田玲子・阿部麻美・



増木優衣、同志社大学教員の三原芳秋、New School (New York)博士号候補生の藤倉康子、小学生の藤倉マナが参加しました。

午後1時半より、市民交流センターでの友永健三さんによる講演、地区の住民の皆様を交えた質疑応答、その後、地区のフィールドワークというたいへん充実したプログラムで、時があっという間に過ぎました。暑い日でしたが、冷たい飲み物や手作りのお菓子までご用意いただき歓迎していただいたのには、ほんとうに感激いたしました。

バッタチャリヤさんとラワットさんからは、住吉地区の訪問は、今回の日本滞在のすべてのなかでまちがいなく最高のハイライトとなった、非常に印象深い経験であった、との感想をいただきました。特に、地区における運動の歴史や、皆様の実験の経験をその場で直接にお聞きできたのはかけがえのない経験だったとのことでした。

私も、さまざまなことを考えさせられましたが、特に住吉地区のさまざまな施設が次々と閉鎖されている状況を見て、現在の大阪市政がもつ実質的な意味を如実に感じさせられました。人びとの思いやニーズをどのように社会や政治のありかたに反映させることができるのか、複雑な現代状況のなかで単純な答えはありませんが、現場からものを考えることの重要性をあらためて感じました。

#### 【参加者の感想】

当日の経験について、参加者たちが記した感想をいくつか紹介いたします。

住吉を散策して、子ども、高齢者、障がいをもつ方を含むすべての住民が、地域に見守られながら暮らせる暖かい雰囲気を感じた。今後のまちづくりは「第5期」として、国や行政に全

てを求めるのではないあり方を模索していくという。私は、互助の精神と粘り強い交渉が、今日の住吉の雰囲気を作り出したと考える。そして、今後の活動の鍵は、これに共感するアーティストや、専門家、ボランティアなどの地域外の人びととの連帯にあると思う。私は、食肉産業をコミュニティビジネスとするネパールの被差別カーストのフィールドワークをしてきた。その中で、人びとが、食肉のビジネスを通してカーストを超えた連帯を築き、そして、その連帯を通して「平等」「合理性」などの価値観を運動に盛り込んでいく姿を見てきた。ネパールのカースト差別と、日本の部落差別とは、背景や構造など異なるが、より「目に見えない差別」へと質が変化しつつあるという点で、似ていると思う。共感で集う人びとの地域を超えた連携が、差別問題を多角的に捉え返し、基本的な精神を引き継ぎながら時代に合わせた運動を続けていく原動力になるように感じる。最後になりましたが、とても暑い日、そして、日曜日にも関わらず、貴重なお話を聞かせていただいた友永様、センターの皆様、地域の皆様に、こころから感謝申し上げます。（中川加奈子 京都大学研究員）

これまで、部落問題を抱える場所に何カ所か足を運んだ経験はありますが、住吉隣保事業のような、部落地域外の事を視野に入れて街作りに取り組んでいるコミュニティを訪れたのは初めてでした。こちらの質問にも一つ一つ丁寧に説明して下さった事がとても印象に残っています。しかし、見学の時間が限られていたので若い世代の方々のお話を伺う時間が少なかったことがとても残念でした。部落問題や差別の問題は、そのコミュニティ内部だけではなく、外部の人々も真面目に考え取り組まなくてはならないものだと思います。次回は是非、「部落」や「非部落」という垣根を飛び越えた若い世代間での対話の機会を持てると嬉しく思います。

（飯田玲子 京都大学大学院生）

今回のフィールドワークに参加し、改めて自身の知識量の乏しさに心疾しさと不甲斐なさを感じた。義務教育課程において被差別部落問題を現代日本の社会問題として学ぶ機会が特別に設けられていない地域に育った、というのは言い訳にはならない。知らないことは問題であっ

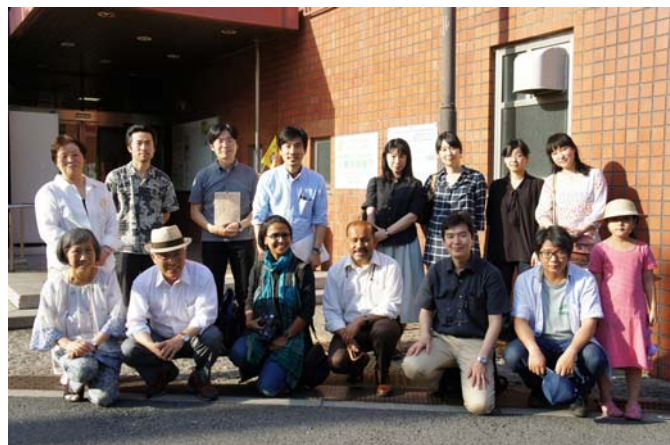
た。座談会において、現代の差別は、ネットを媒介にした可視化されない差別に移行しつつあるという話を伺った。ネットへのアクセスが極めて容易になった今、問題を正しく学べるよう、上記のような地域の教育の見直しが必要であると感じた。(阿部麻美 京都大学大学院生)

フィールド実習から感じたのは、部落解放運動で部落の人々の解放とともにそうでない人々の(「差別者」というポジションからの)解放も視野に入れる必要性である。部落出身者がそうでない人々の社会に「理解してもらい(・・・)」、彼らが部落出身者を「受け入れてあげる(・・・)」という一方向の過程が解放なのではなく、解放とは「部落(外)出身者であること」が差別の温床となってきた根本的な理由の、差別者/被差別者双方による考察のむこうに初めて見るものなのではないだろうか。ゆえにまずは双方が(形式的にしる)つながりを持ち、「考える」ための土台を築くことが要請されるように思われた。(増木優衣 京都大学大学院生)

私は、2004年にネパールのカトマンズで開かれた、カースト差別に関する国際会議で、開会の証言をしたダリットの女性に同行しました。その時に、日本の部落問題も、人種やカースト差別とともに、国際的な人権の問題とされていることを知り、解放運動の最近の展開に関心をもつようになりました。今回、住吉地区でのフィールドワークに参加し、長い運動の歩みが、外部との交渉だけでなく、青年や女性グループの活動、学習会、識字教室、町づくりなど、住民の暮らしに密着したものであったことが底力になっているのだと実感しました。(藤倉康子 New School 博士号候補生)

今回のフィールドワークを通じて、日本の部落差別問題と南アジアのダリット差別問題との共通点や現状の違いなど、多くのことを考える機会を与えていただきました。また当日のアンケートでの質問にもたいへん丁寧なお答えをいただき、とても勉強になりました。「すみりん」の皆様、住吉地区の皆様に深くお礼を申し上げます。

田辺明生 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教員)



## 財団へのご寄付のお礼

公益財団法人住吉隣保事業推進協会の活動は、皆様方からのご寄付によって支えられています。2014年8月以降、以下の個人からご寄付を頂いています。この紙面をお借りしましてお礼申し上げます。

- ・友永香鶴子さん  
大阪市住吉区帝塚山東在住  
金額 100万円
- ・住田次郎さん  
東京都在住  
金額 100万円
- ・梶川さん  
大阪市住吉区在住  
金額 200万円

有難うございました。

[お願い]

引き続き、皆様方のご寄付をお願いいたします。尚、ご寄付いただきました方には、免税の制度がございます。詳しくは財団事務局までお問い合わせください。

## お 知 ら せ

## ☆第 22 回住吉・住之江じんけんのつどい

人権尊重のまちづくりをめざし、幅広く区民が学び、交流する場です。教育・福祉・啓発をテーマに充実した内容となっています。区民が創る人権学習に、あなたも参加してみませんか。

## 【全体会】

テーマ：

「子どもたちとつくる貧困とひとりぼっちのないまち」

講 師：村井琢哉さん（特定非営利活動法人  
山科醍醐こどものひろば）

## 【分科会】

教育・福祉・啓発の 3 つの分野に分かれての学習会（分科会の詳細についてはお問い合わせください）

日 時：11月8日（土）

全体会 13：00 - 15：00

分科会 15：15 - 17：15

主会場：市民交流センターすみよし北

対象者：どなたでも

定 員：350名（申込先着）

参加・資料代：500円（参加・資料代）



## お申込み方法

直接来館・電話・ファックスにて受け付けています。お申込みの際は、1. 講座名「住吉・住之江じんけんのつどい」、2. ご住所、3. お名前、4. お電話番号、をお伝えください。

## お申込み・お問合せ

〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東 5-3-21

大阪市立市民交流センターすみよし北

TEL：06-6674-3731 fax：06-6674-3710

## ☆NHK連続テレビ小説「マッサン」制作に協力！

2014年9月29日から2015年3月28日まで放送予定のNHK連続テレビ小説「マッサン」の制作に、故住田利雄さん（財団法人住吉隣保館 初代館長）が撮影した写真（公益財団法人住吉隣保事業推進協会 貯蔵）資料を提供しました。

「マッサン」は、ニッカウキスキーの創業者である竹鶴政孝とスコットランド人の妻リタをモデルにした物語です。竹鶴は、大阪の住吉（現在の6・7号館の辺り）にあった摂津酒造で勤めていたことがありました。その頃の資料として、当時の写真を提供しました。

その写真が使われるかどうかも含めて番組をご覧いただくと、楽しみが増えるかもしれませんね。



（NHK ホームページを参考）

■公益財団法人住吉隣保事業推進協会  
ホームページアドレス

<http://sumiyoshi.or.jp>

\*2014年度から「すみりんニュース」は、2ヶ月に1回、奇数月に発行致します。